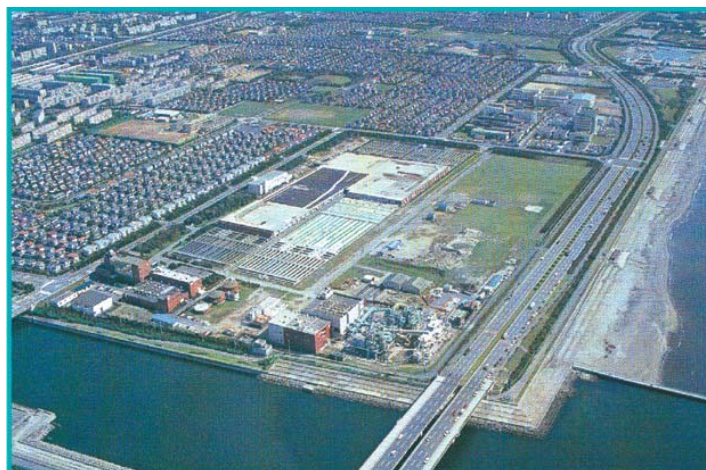


## 印旛沼流域下水道の概要

印旛沼は千葉県の北西部に広がる千葉県内最大の湖沼である。印旛沼の水は水道水源、農業用水、工業用水として利用され、貴重な水源となっている。印旛沼周辺は1960年代後半以降、東京郊外のベッドタウンとして急速に開発が進み人口が急増。その結果、生活排水が印旛沼に流れ込み水質が悪化。水質の保全を迫られることになった。

1968（昭和43）年、印旛沼流域の15市町村を対象とする印旛沼流域下水道の建設が都市計画決定され、千葉県が主体となり事業が始まった。1974（昭和49）年には、千葉市美浜区にある花見川終末処理場の供用を開始、その後、1994（平成6）年には千葉市と習志野市にまたがる花見川第二終末処理場の一部供用を開始、引き続き現在も2017（平成29）年度を計画目標年度として管渠、処理場の整備が進められている。



花見川終末処理場全景

## これからの下水道のモデルケース

印旛沼流域下水道では、下水処理水の多目的利用や地域住民に下水道の役割をPRするとともに、処理場施設の一部を地域の憩いの場として活用してもらうことを進めている。

下水処理水の多目的利用は、幕張新都心の一部地域を対象に、高度処理した処理水を水洗トイレなどに利用するために供給する「再生水（中水）利用」事業と、地域冷暖房の熱源として処理水を供給する「下水処理水再利用（地域冷暖房）」事業を実施している。また下水道のPRとして、流域の地元ケーブルテレビ局による取材の受け入れや、小学生向けの見学会などを行うほか、処理場施設の一部を開放して「美浜ふれあい広場」や「トンボ池」の開設を行っている。一方で、施設の維持・管理と更新をいかに進めていくかが今後の大きな課題である。

印旛沼流域下水道は多くの役割を担うとともに、インフラの維持管理という新たな課題に取り組んでいる。



花見川終末処理場内のトンボ池



管理本館から幕張新都心方面を望む